

## ブログ「ロッシーニのオペラ」

イタリア・オペラ史 (84) ロッシーニの誕生

本文



ロッシーニはモーツァルトが死んだ次の年1792年に生まれた天才です。モーツァルトの像はどれもこれも魅力がうすく、音楽のイメージを落しますが、ロッシーニは似顔絵の似合う人です。2重顎で、出っ腹、誰も憎めない容貌です。音楽もそっくりで、楽観的、人間味が感じられます。このロッシーニ、日本では存外知られていませんが、大天才です。オペラに関心を持つ人なら、絶対忘れられません。本ブログの(35)から(45)にかけてロッシーニの話を書きましたが、ロッシーニの一生について書きたいことがまだあり、少し継ぎ足します。

彼はモーツァルトが死んだ次の年1792年にイタリア中部のペーザロで生まれました。父は市役所のラッパ吹き、母は美人の歌手。モーツァルトは父が教育的な仕事をしていたのに比べ、遥かに庶民的な生い立ちです。

ペーザロは一昨年訪ねましたが、海辺の品のよい明るい小都市で、ザルツブルグの重苦しい宗教都市とは大違いでした。彼がここにいたのは1792年から99年までの7年間に過ぎず、以後この街に一度も戻ったきりのようです。それなのに、この街にはロッシェニ音楽院が20世紀の初めからあり、最近ではロッシェニ音楽祭が毎年開かれます。訪ねた観光客も、この街がロッシェニのイメージにピッタリ合っていて、彼の明るい屈託のない音楽が今でも聞こえてきそうです。

モーツァルトは父親から演奏家として早期教育をうけ、旅から旅の少年時代でしたが、彼はいたずら好きの少年時代、7歳の頃、教会の倉庫に忍び込んでワインを飲み干したなど、逸話が多くこのこっています。音楽教育はボローニアの音楽学校うけます。デビューは作曲家、それも19歳（オペラブッフ「結婚手形」を作曲）だから、モーツァルトがオペラ・セリア「ポンド王ミトリダーテ」を14歳で作曲しているのに比べ、5年も遅れています。二人の音楽の明るさは随分似ていますが、デビュー曲の性格が違いうように、深いところで差があります。

1800年ロッシェニはボローニアに移ります。ペーザロから列車で1時間程度ですが、ここは歴史のある大都市、両親の興行中、豚肉屋に預けられた話は人生の後半、料理家として著名になったロッシェニにとって大事な事件だったでしょうが、音楽家としては、1802年近くのルーゴに転居の方が事件です。ここで裕福なマラルビー一家との交際が始まりました。彼はチェンバロと歌をこの一家に教えてもらいました。モーツァルトが5歳から上流社会と交流のある下流の音楽家一家の一員だったのに対し、ロッシェニは10歳で本当の音楽に触れた、音楽を生業とする庶民の出だったことは対照的です。

イタリア・オペラ史 (85) 絹のはしご

本文

ジョアキーノ・ロッシェニは貧乏な家庭の子でしたから、早くからお金

を稼ぐのを憶えました。いい音楽への素養を師マラルピから得たもののお金の必要があったのです。モーツアルトは父がやってくれたことを、ジョアッキーノは自分でやった、このことが彼の作品に強い影響を与えたと思っただけでしょう。つまり大衆受けが作品には必要でした。

両親とも家庭を留守にしての仕事が多かったのですが、彼は8歳(1800年)でボローニアに転居して、家族と暮らす喜びを味わいます。しかし1802年には又父の故郷、ルーゴに移り、歌手として母と舞台にたつのは12歳のときでした

1805年ボローニアに帰ってからは、1806年(14歳)で大学に入学、その後も歌手やオペラのチェンバロ伴奏として稼いだそうです。決して良い学生ではありませんでした。ベートーヴェンの面白いロッシェニ評があります。

「もし運命の女神が、ロッシェニに天賦の才能と素晴らしい旋律をブッシェル・ビン一杯与えていなかったら、彼が学校で学んだものなど、彼の大きなお腹に入るジャガイモ以外何ももたらさなかつたろう。」

1810年ヴェネツィアの劇場支配人から「結婚手形」の作曲を依頼されると、学校の勉強を放棄して、専念、これが当たって以後ヴェネチア、ボローニャ、フェラーラから注文が殺到することになります。こんな状況は30年前の、モーツアルトには考えられないことで、ザルツブルグという保守的な世界と違い、ジョアッキーノ時代のイタリアには市民階級が

育っていたからです。

当時の著名な作家スタンダールの著書「ロッシェニ」からオペラ作家の生活を垣間見ることができます。オペラの種類は、今まで使った言葉だとオペラ・ブッフア(ファルサ=笑劇)です。

「先ず劇場を持つ町から興行主に注文がきます。その条件にロッシェニの作品を含むという一札がついています。興行主は裕福な貴族の場合が多く、彼らは町からの依頼で劇場の経営を引き受け、先ず歌手を集めます。次に作曲家と契約します。大事なのは歌手が決まっていることです。ロッシェニはここで約千フランをもらったそうです。作詩家はシケタ坊

主だそうで、1曲 60～80 フランで作ります。さて、こうして一座が組織されると、ロッシーニはその町に乗り込みます。彼の滞在は2～3ヶ月なのですが、町に着くと、土地の名士や、金持ちの接待を毎晩のように受けます。こんな気ままな生活を20日くらい続けてから、接待を断り、歌手の歌を聴き、ピアノをたたく日々となります。初演まで20日に迫る頃、歌手の声の特色、勿論下手さ加減もわかってきてから、作曲にとりかかります。取りまき連が周囲にたむろしていても、お構いなしに作曲を続けます。

初演の日は、徹夜で馬車の中で過ごす人もいて、大変な熱気に包まれます。小さな町は1ヶ月前からオペの話題に包まれ、初演後3週間異様な熱気で覆われ、8千から1万の人が見にきます。一方ロッシーニは初演後3日間ピアノの前に座り、聴衆から何度も歓声をあび、挨拶に立ち上がらせられ、3日で800フランをもらって、盛大な惜別会を開いてもらい、次の日、次のオペラのため、次の町へ馬車を走らせます。一座は解散ということになります。」

「絹のはしご」はこんな雰囲気であまれたファルサ笑劇で、軽快な序曲がクラシックのコンサートの冒頭を今も飾ります。「絹のはしご」を毎夜ベランダからおろし、秘密に結婚している彼を部屋に入れる女性をめぐる騒動で、彼女の後見人の思惑が絡んで、楽しい劇となりますが、ハッピーエンド

## イタリア・オペラ史 (86) タンクレーディ

### 本文

イタリア・オペラが1600年フェニーチェでギリシャ悲劇の復活を夢見たグループ・カメラータの研究から発展したのは何度も触れました。200年たったロッシーニの時代にも、その夢は現実の問題でした。ファルサ(笑劇)だけを作った作曲家なら、今も音楽祭など開いてもらえないでしょう。モーツァルトが死の年、オペラ・セリア「ティートの慈悲」

を書いたように、それから 20 年たった 1813 年、ロッシーニもセリア「タンクレーディ」を書きました。ヴェネチアからの依頼です。原作はタッソーとヴォルテールの作品です。ファルサではやりたい放題だったロッシーニもこの曲の初演では大変緊張したようです。スタンダードの本から引用します。

「 - - - ピアノの前にすわるのが習慣だし、またそうするようロッシーニは契約で決められていたが、とてもその勇気がでなかった。姿を見せれば口笛でやじられそうだった。ヴェネチアの聴衆は、前のオペラ（絹のはしご）につけられた例のブリキの反射板による伴奏をわすれてくれそうにないからである。まだ、子供っぽいロッシーニはオーケストラ・ピットに通じる地下道にかくれた。どこを探しても見つからず、時間は迫るし、それにお客がいらいらした兆候をみせはじめたのでコンサートマスターはオペラを開始することにした。序曲の最初のアレグロが大変な好評をえたものだから、ロッシーニは満場の喝采とブラボーがとどろく中でようやく隠れ場所を出て、ピアノ席にすべりこんだ。」

舞台はイタリアの長靴の爪先にある島、シラクーサ。殺人さえ伴う三角関係ですが、爽やかな悲劇です。話の内容は本ブログ (58) の「最後が変れば」で書きました。少し正確に書きます。

シラクーサの前王の息子、今はサラセンの将軍になったタンクレーディ。彼と恋仲にある現王の娘アメナイーデ。現在シラクーサの敵でありながらアメナイーデをしたうオルパツァーノ。

サラセンがシラクーサに攻めてくるのを防ぐため、王は二人の結婚を条件にオルパツァーノの力を借りる。この現状を知らせる手紙をアメナイーデはタンクレーディに書いたが、その手紙をオルパツァーノに盗まれ、宛名がなかったことを利用し、手紙がサラセン王へのものと、悪意の「発表」。事態は紛糾します。

結婚を拒否したアメナイーデは投獄、密かに帰国したタンクレーディは「発表」を信じ、アメナイーデの不実を信じる。しかし死罪に決定した彼女を助ける気持ちは残り、名を隠して、オルパツァーノと決闘をし、

勝つ。しかし、恋人の不実への疑いは晴れないまま、戦地へ赴き、負傷。ここで、手紙が陰謀だったのがわかるのですが、タンクレーディが死ぬという版と生きてハッピーエンドという版があります。ヴェネチアでは後者だったけれど、ロッシーニが両方書いたのです。私は前者が好きですが、こういったことをやってのけるロッシーニのしたたかさに舌を捲きます。

このオペラは台本がよく書けていて初めて見ても筋がわかるだけでなく、筋が自然でありながら、内容は込み入っていて、面白く見れます。DVD もあります。

タンクレーディが密かに帰国したときに歌う「大いなる不安と苦しみの後で」（アリア）や決闘中にアメナイーデが歌う「伏して崇めてたてまつる神よ」（アリア）は名作です。

タイトル

イタリア・オペラ史 (87) アルジェのイタリア女

本文

傑作「タンクレーディ」を出したら、そのヴェネチアから次の作品の注文がきた。売れっ子ロッシーニの出発です。出来たオペラは「アルジェのイタリア女」。僅か3ヶ月後の初演です。

やはり、ロッシーニの本領はオペラ・ブッフアにあるのでしょうか。これが大変な当たりとなり、次のオペラ「イタリアのトルコ人」を生みます。

「アルジェのイタリア女」の話はこうです。囚われた恋人リンドーロを探しにアルジェに来たイタリア女イザベッラは船が難破したため、太守ムスタッファに捕まってしまう。ムスタッファはひと目みて彼女に惚れてしまい、倦怠期の妻の処分を思い立ち、側近のリンドーロに払いさげようとたくらむ。恋人二人は出会うが、こんな状況では意のようになれない。

ここで考えたのが[パパタッチ]という結社の設立。イザベッラは太守の

恋慕を逆手にとって、「女に愛されるにはパパタッチに入会しなければならない」と思い込ませる。パパタッチの教えとは「たらふく食べ、存分に飲み、眠り、他人が何をしても気にせず、沈黙を守る」ということ。太守は入会し、規則にしたがって夢中で食べ飲んでいる隙に、二人は逃亡する。

まあ、たわいのない話ですが、オーケストラが上手にコミカルな味を出すので、我々も太守のように曲にのめりこんで、時間が逃げていくのを忘れるといった次第です。

ロッシーニは勿論コメディとして書いたのですが、彼の考えの奥には当時のイタリア指導層に漂う雰囲気への批判があると、スタンダードは指摘しています。つまり、ナポレオンの登場で、指導層は明日の分からぬ世界に入りこみ、その日暮らしの日々をしていたことです。作曲した1813年、彼は21歳の若さ。正義感のみなざる年でした。

## タイトル

イタリア・オペラ史(88)イタリアのトルコ人

## 本文

ロッシーニがどんな人柄か。作品がとてもユニークだから私には興味があります。彼は特に特定の台本作家と組んで仕事をしたわけでもない。その時その時の要求に応じたい。それでも彼の好みは作品のストーリーに反映していると私は思います。「アルジェのイタリア女」はヴェネチアからの注文で作られ、イタリア女のしたたかさを音にのせていますが、今度はミラノからの注文で、ヴェネチアとは反対の話という要求で、似た倦怠期のイタリア女のしたい放題が男どもの連携プレーが阻止される話をコミカルに描いています。題は「イタリアのトルコ人」。台本作者が舞台上に詩人として登場し、歌手達に指示を与えながら、オペラが進行するという、余り見られない方法で劇が進むのが特徴で、頭がこんがらかる場面もあります。主役はフィオリッラという倦怠期の奥様、

これに色目を使うのがトルコの太守セリム。セリムの元恋人ザイーダは追い出されて、イタリアにきてしまいますが、未だ思いを捨てきれません。フィオリッラとセリムはお互いに気があります。フィオリッラの亭主は事態の進行に手をつけかねて見守るばかり。セリムはこの亭主に「女房は5年も経つと、邪魔になるもの、売らないか」と持ちかけます。「それが駄目なら略奪という方法もある」と脅します。更にフィオリッラには切れていない情人がいます。

彼らの間で混乱が起きますが、この情人を使って、詩人は解決を目論みます。最後の場面、仮面舞踏会で、ザイーダとフィオリッラの服を交換させ、フィオリッラの略奪を思っていたセリムが間違えて、ザイーダをトルコに連れていかせ、ザイーダはハッピー。同時にフィオリッラはイタリアに残って、亭主と情人には目出度し、目出度しの結果となります。オペラは変わらず、歯切れがよく、明るく、テンポよく進行します。名作の評価どおりです。

これを作ったロッシーニは22歳(1814年)。若い天才の花が開いたときで、彼は母の血をついだ男前でもあったから、大変な人気者となりました。オペラの内容や音楽の雰囲気から思うと平和そのものようですし、善意に満ちていますが、当時イタリア北部は厳しい政治情勢にありました。今のイタリア半島は多数の都市国家に分割されていました。これはヴェルディの時代も同じですが、ロッシーニの時代はフランスからナポレオンの侵攻があり、一層複雑な権力争いが繰り返されました。ロッシーニ一家がペーザロからボローニアに移った理由の一つもそれと関係があり、父が当時の権力者に楯をついたグループ(共和主義者)に入り、フランス軍の入りに協力し、新政府樹立に協力したものの、力関係が短期で入れ替わり、彼はペーザロを離れざるを得ず、行ったがボローニアだったのです。貧しさだけでなく、両親との別居という不幸な生い立ちがジョアキーノの性格に大きな影響を与えたようです。天才と彼の音楽的表現方法は不幸と無関係でしょうが、世間との接し方には、つまり世渡りには、生い立ちの陰が強く落ちている、と私は思います。22歳なんて、今は学生。だから人気を得たらそれに溺れる危険はあった筈。慎



重に身を処したボローニア時代のジョアキーノに、私は驚きの念を抱きます。彼は臆病といえるほどの態度で、この後の人生を送ります。決して臆病ではないと、思いますが

イタリア・オペラ史(89)エリザベッタ、イングランド女王

本文

フランス革命は1789年でしたが、ナポレオンがイタリア遠征をしたのは第一回がジョアキーノ6歳(1797年)のときで、これが田舎町ペーザロの平和を乱し、フランス軍に協力した父が後日教皇政府復活でボローニアに転居を余儀なくされます。8歳のジョアキーノは後を追います。似た事態がナポレオン体制の復活した1815年に起きます。フランス軍がボローニアに侵攻し、イタリアの独立と統一を主張すると、同地の愛国者たちはジョアキーノに「独立賛歌」の作曲を依頼、彼の作曲した「起てイタリア、今や時満てり」は熱狂的な喝采を受けます。何んと「イタリアのトルコ人」を作曲した次の年です。すぐにボローニアはオーストリア軍の攻撃を受け、陥落、その支配下になりました。

ロッシーニは父の事件を肌身に沁みて憶えていたでしょうし、当時も貧しい両親に収入の三分の二を送っていたそうですから、彼は自分の立場がどんな結果を生むか覚悟していたのは間違いありません。モーツァルトもそうですが、作品の偉大さと人格の偉大さは別問題です。ロッシーニは普通の人間だったと私は思います。

彼は天才興行師バルバイアの招聘で、ナポリに転居、1815年秋以降、サン・カルロ歌劇場とフオンド劇場で音楽監督と新作歌劇を年2曲作るとの契約を結びます。これがロッシーニの傑作を生むきっかけになりました。ロッシーニのナポリ転居の判断で人類は貴重な遺産を得たことになります。

当時ボローニアなど北イタリアはオーストリアの支配下、ナポリもその影響を受けたものの主としてフランスの支配下にあったから、ロッシー

ニは両親をボローニアに残したままとはいうものの、ナポリでは平和な暮らしが出来ました。彼はバルバイアという興行師と契約してナポリに移りましたが、最初の作品が「エリザベッタ、イングランド女王」です。話はイングランドとスコットランドの対立が激しい時代の出来事です。イングランドは後のエリザベス1世女王の支配。今から想像すると、女王は権威と華麗さに包まれた存在ですが、当時は英国平定に意を注いで余裕のない、君主。殺人もすれば恋もする人間くさい人間です。彼女はスコットランド女王、マリア・スチュアルドとの争いの渦中で、レスター公爵の働きで、やっと勝利をえました。帰国した公爵に女王は以前から恋していましたが、スコットランドとの戦いの最中に公爵は敵の女王マリア・スチュアルトダの遠縁の女性と恋に落ち、秘密の結婚をします。この事実を聞いた親友ノーフォークはこれを女王に漏らしてしまいます。

エリザベス女王は私憤も混ざり、二人を投獄、元老院は敵に通じたと判断し、死刑を求刑します。ノーフォークは親友を裏切ったとして、女王から追放され、逆恨みしてレスターに反乱をそそのかします。女王は元老院の判決に不満で、自らレスター公爵脱獄の手引きをするため、地下牢にき、ノーフォークの反乱をしります。レスターが女王に味方し、そこへ民衆もレスター助命を嘆願にきます。女王は決断してレスターを無罪とします。彼女の最後のアリアは「この心よりの恋よ逃げされ」で、女王の義務をまっとうするのが自分の本分と誓うのでした。

ロッシーニは女王役を後に妻となる、7歳年上の名ソプラノ、コルブランに歌わせます。

DVDは数少ないようですが、私が見たのでは女王のアリアが断然多く、次に目だったのがノーフォーク（テナー）のアリア。レスターの妻の弟は女性がやっていました。美声優先のオペラです。なお女王の役は後にロッシーニの妻となるコルブランがやり、その見事な演技は女王を彷彿とさせたと伝えられています。

なおこれは史実です。レスターは晩年まで女王の第一の側近としてイギリスの安定に貢献したそうです。

タイトル

イタリア・オペラ史(90)「セビリアの理髪師」と「新聞」

本文

興行師バルパイヤとの約束で、ナポリ用のオペラを二つかかなければなりません。出来たのは 1816 年用として「新聞」と「オテロ」でした。しかし皮肉なことに今も彼の名を不滅にしているのはローマのアルジェンチーナ劇場のために書いた「セビリアの理髪師」です。彼は 1816 年 2 月 20 日にローマで初演しました。先輩で生きていたパイジェルロと同じ題材ですから、彼は色々と気を使ってパイジェルロ派の反感を買わないよう努力しました。例えば題名は「アルマビーバ伯爵・・・無用の用心」としたのです。初日こそ、色々な邪魔も入って舞台上に猫が登場するなど、評判になりませんでした。2 日目以降は大変な人気を集め、上演は大成功を収めたのです。原作はボーマルシェの書いた「セビリアの理髪師」(1775 年) (演劇) で、市民にすぎない床屋フィガロが貴族アルマビーバ伯爵を助けて、ロジーナへの恋を成すという話です。(ブログ、イタリア・オペラ史 56) オペラは騒音を理由に軍隊が私邸に入ってくるなど、自然の流れのなかで、スケールの大きな舞台となっていて、多くの演出でみましたが、どれも立派です、アリアとしては伯爵をしたう、ロジーナのアリア「この歌声を」が単独でも歌われほどの人気作です。

バルパイヤとの約束で作ったオペラ「新聞」の初演は 9 月 26 日にナポリのフィオレンティーノ劇場で行われました。本命のサン・カルロ座が火事にあつたためです。パイジェルロ派の妨害は予想されたことでした。ロッシーニは作風を「セビリアの理髪師」の重厚な感じから変え、パイジェルロ風の軽いタッチにして批判をかわそうとさえしたのです。しかしこのオペラの評判はパイジェルロ派の陰謀で悪く、軽演劇的な性格も災いして、世の中から無視されました。

21 世紀になって復活し、私が見た 05 年のペーザロ音楽祭でも見事な上演があつて、同じものがスペインでも行われるほどでした。

【新聞】は当時始めて世にでた珍しさを題材としています。ある実業家が娘の婿探しに広告を使ったことに絡めたコメディです。広告のお陰で、相次いで訪ねてくる求婚者に対し、既に恋人がいた娘は、様々な策略で、父の意思をはぐらかし、最後は了承をうるというもので、扱いが前述のように軽いから、オペラも軽い印象を受けますが、内容はどうして手がかかっていました。このオペラの序曲は後に、有名な「シンデレラ」の序曲として使われたので、そっちの名で有名です。序曲の流用はロッシーニの常套手段で、有名な「セビリアの理髪師」序曲は実はそれまでに2回他のオペラで使われています。

ロッシーニは普通の印象とは違って、新しいタイプの作品を常に模索していたようです。一見どれもこれも同じと感じられるのは聞き手に問題がありそうです。【新聞】が一つの区切りで、次の名作「オテロ」は12月4日、ナポリのフォンド座で上演され、メロ・ドラマ時代の幕開けと評価されることとなります。別の見方をすると、【新聞】はオペラ・ブッファ時代の終了との谷間に咲いた百合であったのでしょう。

## イタリア・オペラ史(91) ロッシーニの「オテロ」(改稿)

本文

ヴェルディのオペラが有名になる前は、「オテロ」というとロッシーニの「オテロ」を指したそうです。もっとも有名なのはシェクスピアの「オテロ」です。

「劇は美しい声のやり取りで進む。悪役イアゴがかってデスデモナに振られたのが、昇任の問題とともに裏切りの根源にある。

彼女がムーア人オテロを愛しているのを父は知っていたから、まだましな総督の息子ロドリーゴを結婚の相手を選び、パーティーで公表する。オテロには彼女の裏切りに感じられる。実はデスデモナからの愛の告白(恋文と髪)を父が抑えたのをオテロは知らなかった。オテロの嫉妬は

ロドリゴに向けられる。そしてロドリゴと決闘してオテロが勝つ。オペラの第2幕と3幕は全てがオテロの憎悪の表れである。

悪役ヤーゴが、デスデモナのオテロへの愛の告白である「恋文と髪」を手に入れ、巧みに使い、オテロの嫉妬心を煽る。3幕ではデスデモナを殺すとき、オテロは「ロドリゴはイアゴが殺した」といい、デスデモナの反応をみるが、デスデモナは「全てがイアゴの陰謀」とこのとき理解して動揺する。これをロドリゴの死を知ったため動揺したと誤解して殺害、直後父やロドリゴの寛恕も無駄となり、自死する。」

内容はヴェルディとは違うし、普通「オテロ」というとシェクスピアを考えるけれど、それとも違います。シェクスピアでは嫉妬の対象はロドリゴではなく、キャシオでした。

ヴェルディのオペラはシェクスピアに由来しています。

しかしオテロ物語は実はシェクスピアが考えたのではなく、既にあったものだというのが定説です。原本は1566年ヴェニスで刊行されたツィンツィオの「百物語」第3編第7話であるのも分っています。(シェクスピア「オテロ」は1604年作)。批判は「百物語」を基準にして行うのがいいでしょう。

原作と比べるとシェクスピアは劇的な面を強く捉えているのがわかります。(ヴェルディでは更に劇的な強調があります。)これと比べロッシーニの「オテロ」は叙事的です。オペラの台本はナポリの社交界の花形、ベリオ・ディ・サルサ侯爵です、彼は優れた教養人で、当時デユシスが書いた、「シェクスピアによる、華麗なオテロ物語」を元に台本を作成したようです。勿論「百物語」も知っていたことでしょう。既にシェクスピアの死から200年経っていましたが、これら教養人はその名を知っていた筈です。ただしイタリアではシェクスピアは無名でしたし、評価もたかくないようでした。(勿論ヴェルディの登場は50年後。)

ロッシーニのオペラはこの作品から作曲法が変わり、メロ・ドラマと分類される、音楽を伴奏にする朗読劇の様相を見せています。それにあわせるように、筋立ても面白さを強調して台本が出来ているようです。シェ

クスピアではイアゴのハンカチと知られる小道具を使っていますが、ここではデスデモナがオセロに送った恋文と彼女の毛が小道具です。肉体を感じませんか。「百物語」やシェクスピアでは舞台が主に戦地のキプロス島であったのが、ロッシーニでは終始ヴェネチアです。更に大きな違いは前2者ではほぼ夫婦の時代なのに、オテロとデスデモナは婚約はしているし、内緒の結婚まで進んでいるけれど、夫婦ではないのです。これは全くドラマを変えます。オセロの嫉妬は婚約者の裏切りレベルであって、シェクスピアのように人間の本質に嫉妬を置く、深刻なアプローチとは違います。

明るい劇の進行は、軽く扱われている感じがして、深みがないと批判されるのは分かります。しかし思ってみてください。ロッシーニは人生の深みを「オペラ」にしようとは思わない人です。これで十分ではありませんか。3幕の殺人劇でさえ、美しいドラマになっていて、一つのメロ・ドラマの名作が出来たのを私は喜びます。

私がブログを書くとき、必ず実演かDVDをみます。ロッシーニ作品を全てとりあげられませんが、大事なものは避けないことにしています。しかし今度ばかりはそれが出来ませんでした。CDしかないからです。これはとっても大事な作品です。今年のペーザロの音楽祭で「オテロ」が見られます。ロドリゴ役を人気絶大なスター、フローレスがやるそうで、私は見る予定です。（このオペラは「音楽劇」とロッシーニは名づけています。）

タイトル

イタリア・オペラ史 (92) ロッシーニは「シンデレラ」

本文

「シンデレラ」は「冗談のメロ・ドラマ（朗読劇）」と名がついています。前作「オテロ」は「ドラマ」と名づけていますが。こういう違いはロッシーニの製作上の気持ちを表しているように私は思いますが、普通殆ん

ど気にされていません。ブッフアとセリアに分けてしまうだけです。シンデレラ劇は有名な話のオペラ版です。

「イタリア語でチェレントラと呼ばれる灰かぶり娘は継父と異母姉によって虐め抜かれています。母が彼女を連れて子持ちの父に入籍そして遺産を残して死んだためです。遺産は父が横領しています。そこへ王子の結婚話が持ち上がり、この男爵家の娘達が候補に上がります。結婚の適否調査のため、哲学者アリドーロは事前調査と王子と召し使いの交換という2つの手を打ちます。アンジェリーナはこの策略と無関係に行動し、変装哲学者を優しく労わり、召使に変装する王子と恋に落ちます。二人の姉は逆の行動をとり、哲学者にはつれなくあたり、舞踏会で偽王子に入れあげ、偽召使を無視します。哲学者は男爵家に3人目の娘がいるのを調査し、父の拒否を無視して、彼女を舞踏会に招待します。正装した彼女の美しさは格別で、舞踏会のスターとなりますが、時間がきて、腕輪の半分を残して、「思し召しがあれば」と家へ帰ります。王子は嵐という偶然もあって、男爵邸に辿り着き、娘の腕に探していた腕輪を見つけます。かくして灰かぶり姫は一躍王妃への道を歩むこととなりますが、挙式の前に姉と父の非礼を許す、壮大華麗なアリアを歌います。私が持つビデオでは劇の最後なのにチェチーリア・バルトリが名唱を聞かせています」

このオペラはジョコーソ（冗談）と呼ぶだけあって、コミカルな演技で筋が運ばれます。しかし、王子とシンデレラと哲学者は極真面目に歌い、演じます。「セビリアの理髪師」のようにブッフアと名づけたものと違うオペラであるの是一目瞭然です。また前作「オテロ」はドラマと名づけていますが、これとも違うオペラであるのは見終わった印象ではっきりしています。1816～1829（「オテロ」から「湖上の美人」まで）をメロ・ドラマの時代と呼ぶ人がいるように、ロッシーニは新しいオペラのスタイルを模索し始めたと考えたらどうでしょうか。序曲は「新聞」からの転用。

ロッシーニはシンデレラ・ボーイだった、と私は思います。ある日突然

と言うほどではないとしても、ボローニアからナポリに移ってから、シンデレラ・ボーイとなりました。

彼はボローニアで既に有名人ではありましたが、1815年にナポリに移って、庶民の泥臭さをなくしていったし、もともとあった気位の高さはここで洗練されていったように作品を聞いていると感じます。彼は貴族のパーティに呼ばれ、知己も増えました。ナポリで当時のナンバーワン・ソプラノ、イザベッラ・コンブラン女史と知り合い、恋仲になります。彼女は7つ年上、ロッシーニが23歳ですから30歳、歌手としての円熟と、美しさを兼ね備えていた筈です。ロッシーニをナポリに呼んだバルバイアの恋人だったされていましたが、何時の間にかロッシーニに代わりました。作曲当時、ロッシーニはシンデレラ・ボーイだったと私は思います

作曲家が決められた歌手達の力量に合わせて作曲するのは当時は当たり前でしたから、ロッシーニがコンブランの美声と優れた技術を配慮して多くの優れたオペラを作ったことになります。「エリザベッタ」「オテロ」「アルミーダ」「エジプトのモゼ」「エルミオーネ」[湖上の美人]「ゼルミーラ」などがその例です。

「シンデレラ」はローマのヴァレ劇場で1816年1月に上演されました。1816年2月にナポリのサン・カルロ劇場が火事でやけます。ロッシーニは契約を履行する劇場をなくしました。

タイトル

イタリア・オペラ史 (93) 傑作「泥棒カササギ」は実話

本文

このロッシーニの曲は序曲が大変有名、コンサートで、この次がベートーヴェンのコンチェルトがやられることが多いので、昔から聞いていましたが、オペラを見しかも内容が本当とは。今度文を書くために調べて初めて分かったのです。「匙一つで絞首刑になった」と言う話がネタ。



台本ではハッピーエンドですが。

「格別に色々な楽器が出てくる序曲で、オペラの主役はニネッタ、彼女には恋人ジャンネッタがいる。ジャンネッタは除隊してきて、二人は幸福の絶頂にある。ところがジャンネッタの両親は時々、銀のスプーンが無くなるのをいぶかっている。そこへニネッタの父が娘会いたさに上官と喧嘩をして兵舎から脱走してくる。当座の金が必要で、娘に銀食器を売って換金してくれと頼む。そこへ丁度、ジャンネッタの両親が登場、今日も銀のスプーンが無くなったと言いたて、今日銀食器を売ったニネッタに疑いの目をもつ。ニネッタの父の追及のためきた悪判事ボデスタがこの事件をしり、彼女への色目をもつたから、ニネッタは疑惑の人となり、入牢、恋人にさえ疑われる。

ニネッタは牢中で悪判事に釈放の条件に貞操を要求され、拒否、彼女の心配は父への銀食器代金の手渡しが無能なこと、親しいピポを呼んで、依頼。恋人との別れの修羅場も終えて、ついに裁判、死刑判決、そこへ脱走した父が娘の赦免を願って出頭。しかし事態は変わらない。ニネッタは見せしめのため、絞首刑場へ連れていかれるが、執行直前、ピポはカササギが匙を盗む現場に出会い、急いでその巣を探ると、多数の銀の匙が見つかった。緊急事態発生を報せる半鐘をたたき、辛うじて死刑執行を免れ、父も赦免されて目出度し、目出度し。」

実際にあった話では、気の毒な召使女がパリ近郊のパレゾーで絞首刑になり、執行のあとで、カササギの悪戯であることがわかって、追悼の「カササギのミサ」が作られたそうです。

1817年春、ミラノのスカラ座のために作られたオペラです。当時ミラノはイタリア一番の都会で、しかも優秀な人材がいると自負していましたから、「泥棒カササギ」が上演されるときも観客は厳しい批判的な態度でした。これを知っていたロッシーニは恐れおののいていました。初演の日から大変な好評で、オペラを何度も中断して、「ロッシーニ万歳」「ブラボー、マエストロ」と言う叫びが起こり、そのたびにロッシーニは舞台上がってお辞儀をしたそうです。

どうしてこんな悲しい劇をオペラにしたか。無理にハッピーエンドにし

ているものの、音の響きは暗いし、歌も悲しいから、ロッシェニらしくないのです。わけありに違いないと調べてみたらこんなことが分かりました。1815年に王政復古があり、1820年にはまた革命があるという、この時期は不安定な政情だったせいか、裁判でも目に見えた不正が横行していました。この劇の台本を批判したロッシェニの寸言が残っています。

「あの若い兵士（ジャンネット）はフランス人のくせに間抜けですよ。私は戦闘に加わったことも軍旗を奪ったこともありませんが、もしあの男の立場なら、恋人が告発されているのですから、スプーンを盗んだのは俺だと叫んだでしょう。渡された台本では、ニネッタは悪すぎる状況証拠に途方に暮れ、何も答えられない。ジャンネットは馬鹿な男です。だからフィナーレの主役は判事（ボデスタ）以外にありません。あれは悪党ですがね。しかし陽気な男だし、その上ニネッタを破滅させる気はてんでない。尋問中、何を考えているかという、もったいをつけて、彼女を特赦し、その見返りをせしめることだけなのです。」「似た話、私の故郷ペーザロではよくあります」

この時代ロッシェニの作曲はロマンチックに向かっている、幻想的だったのですが、それなのにこんなオペラが出た。しかも名作の誉れが高い。彼の正義感がひそかな動機だったと私は想像しますが。

これをロッシェニはドラマと呼んでいます。ドラマは悲劇喜劇とは違う分類で18世紀に現れたもの、正劇と訳したらいいのでしょうか。メロ・ドラマもこの一種でしょう。

このオペラも今年のペーザロの音楽祭で上演されます。楽しみです。

タイトル

イタリア・オペラ史（94）オペラ「アルミーダ」では魔法使いがでる  
本文

ロッシェニはナポリのために年2つのオペラを書く契約をし、「オテロ」

を 1916 年の 12 月にナポリのフォンド劇場で上演しました。

前前回紹介したのは「シンデレラ」(1917 年 1 月、ローマ)、前回は「泥棒カササギ」(同年 5 月ミラノ)でした。彼はローマからミラノへと旅をしました。ナポリのサン・カルロ劇場が 1916 年 2 月火事でやけ、復興が 1917 年 1 月だったせいでしょう。

さてそう契約を無視もできないから、ロッシーニはナポリでの仕事にもどらねばなりません。出来た作品は奇妙なものです。魔法使いがでるオペラです。これが出来る経緯には逸話があります。期日に間に合わせるため、興行主は田舎まで行ってロッシーニを捕らえ、牢屋の中で作曲を完成させたそうです。

「時代は 11 世紀末、有名な十字軍に絡んだ話。十字軍はイスラム教徒をキリスト教の聖地エルサレムから追放する運動で、有名ですが、異教徒の我々からみると、奇妙な運動です。何故奇妙か、イスラムはもともと長い間、そこにいたのですが、キリスト教圏がこの頃気象の影響で農作物の収穫が多く人口が増えたので、一種の勢力拡張の一環で、異教徒追放を意図した側面が十字軍の運動にはあるからです。十字軍は神の使命を帯びた正義の人と自負、するとイスラム信者は未知の化け物になります。この背景がわかると、このオペラは少し親しみやすいものになるでしょう。主役は十字軍のリナルド、その恋人アルミーダは魔法を使う、ダマスカスの女王(異教徒)。彼女は十字軍の騎士 10 人(うち 6 人がテノール)を貸してくれと申し込む。でも十字軍側はリーダー格が戦死したので後継者選びの混乱中。アルミーダの本音は恋人リナルドで彼 1 人を分離させること。十字軍は仲間割れの決闘の結果、彼女の願いは成就、彼女は魔法で森林を美しい庭園にかえ、リナルドのココロをつなぎとめるのに成功する。

そこへリナルドの仲間が二人表れ、庭園の美に驚くが、アルミーダの目を盗んでリナルドに会い、彼に盾に写った姿をみせ、自分の軟弱な姿を反省させます。驚き、彼は騎士団に戻り、戦場に赴く。アルミーダが現れ、三人を追い、最後には魔法で龍の挽く車にのり、追跡する。」

初演時にはアルミーダをロッシーニの恋人コルブランがやったが不調で、悪評をあびますが、2度目以降は人気を挽回しました。オペラは森の深い響きなど、ロマン派を思わせる音楽になっていますし、「セビリアの理髪師」で頻用されたロッシーニ・クレッシェンド（音楽を盛り上げるための作り方の一つで、音がだんだん早く、強くなる作曲方法）がなく、オーケストラの音色を変えて、オペラを盛り上げます。彼は新しい方向を又も模索し始めているように感じます。この方法は数年先に作った「湖上の美女」で完成します。テナー6人が必要なのも音色へのロッシーニの要求でしょう。

このDVDも入手できませんが、ロッシーニ・オペラにとって大事な曲です。

私のCDではマリア・カラスがアルミーダをやっていて、ピッタリです。ロッシーニはメロ・ドラマと呼んでいます

タイトル

イタリア・オペラ (95) 海に道を作る「エジプトのモゼ」(モゼとファラオ)

本文

神聖悲劇とロッシーニが呼んでいる「エジプトのモゼ」。1818年ナポリのサン・カルロ劇場で上演されました。彼は未婚の26歳です。ロッシーニには珍しく宗教がオペラの題材になっています。お客は多分面白くなかったでしょう。1919年に手が加えられ、パリで上演されて少し評判を回復しました。それが大改良され「モゼ」または「モゼとファラオン」の名で1927年パリで再演され、やっと歴史に残る名作になりました。私が見たDVDはこれです。壮大なグランド・オペラになっています。

「モゼはモゼヘブライ人の預言者。彼が率いたイスラエルの民が、エジ

プトからイスラエルへ帰る苦難の道を述べた話で、出エジプト記として知られ、ヴェルディの「ナブッコ」などでも取り上げられている有名な話です。モゼだけではドラマは成り立たず、恋愛が絡めます。

エジプトの王宮に捉えられていた娘アナーイデがモゼのところに帰ってきて、言うには「エジプト王ファラオがイスラエル人の帰国を許した」と。歓喜が民衆を包む。(彼女は長い幽閉生活中エジプト王子アメノーフィを愛してしまった。彼は異教徒であり、悩みは深刻になる。) その時、天空は闇につつまれ、モゼは山の頂に上り、神から「モゼの十戒」を受けてくる。イスラエル人はこの良き日を讃えて散っていく。

娘アナーイデは1人残り、そこへエジプトの王子アメノーフィが現れて、彼女の帰国を妨げるが、彼女は迷いながらも神への愛を宣言する。事情を知らないエジプト王ファラオは王子の結婚を決めるが王子は拒否、事情がモゼに関係ありと判断し、王は考えを変え、イスラエル人の帰国を認めないと約束を破棄する。モゼは怒り、天を仰いで、祈り、杖をあげると、太陽は忽然と姿を消し、エジプトは闇になる。

太陽が出ぬのをエジプトの民も王ファラオも恐れ、再びイスラエル人の自由を認める。王は王子にイスラエルの娘などに執着するなど説く。王子はモゼに殺意を抱き、母シナーイデに告げる。

エジプトの神であるイシデの神殿で、神に祈る王たち、そこを通過するイスラエル人たち、モゼは即刻解放を要求するが、王ファラオが言を左右する。その時紅海の異変を告げる報せが入り、エジプトの民は恐れおののくが、モゼが杖を上げるとイシデの神殿の火が消え、異変がおこる。王はモゼの力を恐れてその要求を呑む。

王子アメノーフィはアナーイデを執拗に追い回すが、彼女は最終的に神を選ぶと答え、王子は復讐を宣言する。

紅海に辿りついたイスラエル人は遠くエジプトの軍勢の砂埃を。モゼの強い意志で海を渡る決心をする。すると海は二つに分かれ、道が出来て、イスラエル人がわたる。終わったとき、エジプト軍が到着、後を追って海の道に入るが、やがて、海は道を塞ぎ、エジプト軍は水に飲まれる。」私のDVDはパリ版のオペラであるせいか、舞台は華麗で、大合唱団が

あたりを圧します。

イタリアではオペラ・セリアとして、今も何年かおきに上演される唯一（「ウイリアム・テル」も入るかも）のものだそうです。この曲はオペラではなく、オラトリオとして上演されることもあります。オラトリオの和名は聖譚曲、つまりキリスト教関係の事跡を叙事的な物語にして歌う教養的な歌です。このオペラも合唱が続きます。力強く華々しい。その隙間を縫うようにアナーイデのソプラノが走り、アメノーフィのテナーが甘くささやように感じられますが、私には場違いの感じがします。モゼのバスは力強く、オペラの枠組みを明示していて心地よく感じられました。合唱はエジプト人とイスラエル人とに二分され、大波の交代するかのようには舞台を揺らします。王妃シナーイデははっきりした声でこれらの波をかき分けて進みます。

オペラという枠組みには入らないかもしれませんが、音楽のつくりは明確にロッシーニの作品であることを示しています。

ロッシーニがファルサ笑劇という、いわば最低のオペラから出発し、今や歴史に残る作品を作れるようになったことを、改めて感じさせるオペラです。

タイトル

イタリア・オペラ史 (96) ギリシャ悲劇「エルミオーネ」

本文

ナポリ時代のロッシーニの頭はどうなっていたか、異常に多様な時代の原作を選択しています。前回の「モゼ」が紀元前 15 世紀の話とされているのに、前々回の「アルミーダ」が紀元後 11 世紀の話、今回の「エルミオーネ」はギリシャ時代、ローマ以前の話だから、紀元前 5 世紀の話です。（初演は 1819 年）。これらを彼はドラマと呼んでも、オペラとしてはセリアに入る、硬いです。それにナポリへくる数年前のボローニャ時代に書いた、ブッファは彼の作品から殆んど消えてしまいました。

興行主のバルバイアの意向だったとは思えません。「セビリアの理髪師」「シンデレラ」を書いたあと、ロッシーニはイタリア・オペラの伝統にもどりたいと、決心したと私は思います。ヨーロッパには「過去を水に流す」という発想はなく、過去の積み重ねの上に築く文化に関心があります。

「エルミオーネは嫉妬を主題にしている、単純に整理すれば「オテロ」に似た話です。エピロという国の国王ピッコはトロイ戦争でえた捕虜、アンドロマカの魅力に囚われ、婚約者エルミオーネがいるのに、彼女にうつつを抜かす。アンドロマカは子連れで、死んだ夫をまだ忘れきれないのに、国王ピッコは子供の命を取引材料にさえて、母アンドロマカを惹きつけようとする。この王の所業は側近の危惧、民衆の輿論さえ買う。

一方エルミオーネは王の気持ちが離れていくのに、嫉妬し、憎悪し、やがて殺意さえいだく。彼女をしたう、オレストを挑発し、殺人を計画する。

国王ピッコはアンドロマカの子供を殺すと宣言、彼女は暫くの猶予を願い、遂に王の意に従うことを誓う。王は女王誕生、その子を後継者に任命する。他方エルミオーネはオレストに殺人を示唆、オレストは実行し、成功するが、エルミオーネは女の気まぐれとしてオレストの愛情を拒否し、彼はギリシャに逃げ、幕となる。」

登場人物も話も新しいものではありません。作曲が新しいのです。私がみたのは英国のグラインドボーン・オペラの 1995 年ものの録画です。オペラでは合唱の重みが大きいようでしたし、エルミオーネの演技では嫉妬より、憎悪が勝っていたように感じました。音楽にはロッシーニ的な快適さはあるものの、深みを狙った響きが多く、他の演奏を見ていませんから、断定は出来ませんが、モーツァルトやグルックのセリアと大きな違いは感じられません。各登場人物に特定な性格、例えばエルミオーネには嫉妬、オレストには哀願、国王は傲慢といった性格が割り振られているのはバロック・オペラの特徴と似ていました。これからロッシーニが発展させる、総合芸術的な試みは未だ萌芽です。1819 年の作で

も 10 年後の「ウイリアム・テル」という彼の最終オペラへの第 1 歩を  
ふみだしたと私は感じます。

タイトル

イタリア・オペラ史 (97) ロマンズ「湖上の美人」

本文

オペラの舞台はスコットランドです。スコットランドはイングランドと  
陸続きです。イングランドはローマ時代、ハドリアヌスの砦までローマ  
領だったので、その北にあるスコットランドは未開の地として残された  
と普通思われています。現在のスコットランドとイングランドの国境は  
この砦跡よりもう少し北にあります。前作のオペラ「エリザベッタ、イ  
ギリスの女王」では彼女の敵はスコットランドの女王マリー・スチュア  
ルダでした。イギリス人でなくとも、当時のヨーロッパ人のイメージは、  
スコットランドは、神秘の国、野蛮が支配する国です。「湖上の美人」  
はそんな場所が舞台です。作品は 1819 年(27 歳) ナポリで初演されま  
した。

「スコットランド王ジャコモ 5 世の時代。舞台は岩山に囲まれた湖が多  
いスコットランドの地方。ロマンチックな雰囲気。王は変装してこの地  
に偽名でまぎれ込む。たまたま湖上に船を漕ぐ美人エレナに出会い、そ  
の洞窟に案内される。ここは反乱軍ロドリーゴの隠れ屋。美人エレナは  
父が反乱軍に入っているので、ここに身を寄せている。今日は首領ロド  
リーゴとエレナの祝儀の日、エレナには恋人マルコムがいて、気分は浮  
かない。ジャコモ王はここが反乱軍の家であることに気づき、エレナに  
うしろ髪を引かれながら、礼を言って立ち去る。別れ際に宝石の指輪を  
与え、万一の時には、これを王に見せれば、困難が解消するとの言葉を  
残す。

洞窟内は出兵がまじかに迫り、またエレナの父は彼女に首領ロドリーゴ



との結婚を迫る。その話を恋人マルコムが密かに聞き、怒ってロドリゴに決闘を申し込む。王の軍勢の接近の知らせに、懸案は棚上げされる。戦いが終わり、ロドリゴは死に、エレナの父は自らの死と、一族の安全の交換を王に申し出る。エレナは宝石の指輪をもって王との面会に出向く。仲介者と思っただのが実は王で、彼は全てを許し、エレナとマルコムの結婚を認める。」

話の終わり方は前作「エリザベッタ」に似ています。私情を殺し公に徹する王を描いています。

この音楽はドイツ音楽を思わせるような深い響きをもっています。ロマン派音楽はこの頃歴史の表面にでてきますが、田舎であるナポリにいたロッシーニには身近ではありません。彼は彼の考えでロマンチックな響きを考えたのでしょう。ドイツのロマン派には森の響きがありますが、この音楽では洞窟の響きが私には感じられます。スコットランドは洞窟が舞台となるドラマにはピッタリでしょう。

ロマン派のメンデルスゾーンはスコットランド旅行の思い出に「フィンガルの洞窟」という傑作を書いています。私は2度スコットランドの西側にある、ロッホ・ローモンドという湖を訪ねました(写真)。ロッホというのは「入り江」の意味で、海の水が山奥まで入りこんで、作った大きな湖が、西側には沢山あります。周辺まで岩山が迫っているところもありました。そんな場所には廃墟となった古城が残っていました。このオペラの舞台は南北に長いロッホ・ローモンドの北東にあるロッホ・カトリーヌだそうです。

私が見たDVDは1992年のスカラ座のもので、終始舞台は暗く、ロマンの香りが漂い、湖上の美人エレヌはジューン・アンダーソン、「夜目遠目笠の内」に分類される美人でしたが声は抜群。音楽はロッシーニの新しい方向を示す、ロマンチックな響きに満ちていますから、ブッフアとは離れた位置の作品です。初演はナポリで1819年に行われ、美人の役はスタンダールによればおおよそ美しくないピザローニ嬢がやり、恋人コルブランは脇役に回ったそうです。

>



ロッホ・ローモンド

タイトル

イタリア・オペラ (98) 死をかけた証言「ビアンカとファリエーロ」

本文

前作「湖上の美人」が 1819 年 10 月 14 日にナポリのサン・カルロ劇場で初演され、当日は散々やじり飛ばされ（翌日は好評）、ロッシーニは逃げ出すようにミラノに向かいました。ミラノではこのオペラの初演が待っていたからです。初演は 12 月 26 日にスカラ座です。

「ピアンカとファリエーロ」は「ドラマ」と、ロッシーニは名づけています。

ヴェネチア（ヴェニス）17 世紀の出来事で、シェクスピア劇の翻案とされてます。

「二人は恋人です。ビアンカ（ソプラノ）が家柄がいい。この一族は相続の問題で親戚同士がいがみあっている。和解のため、フランチェスコ（テナー）は娘ビアンカを、甥のカルロ（バス）の嫁にしようとする。ビアンカは恋人ファリエーロ（メゾソプラノ、女性歌手）と密会し、事態の緊急さを訴え、駆け落ちも考えていたところに、父が登場。ファリエーロは秘密の地下道から逃げたが、その道がスペイン大使館を通過して

おり、屋外へ出たところで、スペイン官憲に捕まり、ヴェネチア政府に突き出された。外国と密通したとみなされ、死罪になる運命に陥る。十人委員会での最終審問の場でのフランチェスコの弁明、そこへ突如ビアンカが現れ、スペイン大使館へ入らざるを得なかった事情を熱烈に説明し、罪は自分にあると宣言する。ここで歌われるビアンカ（ソプラノ）ファリエーロ（メゾ）フランチェスコ（テナー）カルロ（バス）の4重唱「天よ私の唇は」が圧巻。ビアンカ捨て身の告発が審問者の心を動かし、無罪となって、ハッピーエンド」

ロッシーニはこの頃年3つぐらいオペラを作るのが普通でしたが、6週間で1曲書かねばならないことさえあったそうです。前に書いたオペラの一部を他のオペラに使うのは何時も彼が使う手でした。スタンダールはこのオペラのおロジナルは4重奏と最初のカバティーナだけ、などとひどい指摘をします。そんな仕掛けで、結果として出来た名作がこれではないか、と私は思いますが、どうでしょうか。

このオペラの4重唱は大変人気があったので、一作前の「湖上の美人」で2幕の始めに流用するのは普通になったそうです。ロッシーニの常套手段であった自作の流用にはもっとひどい話があります。この作品の前年にヴェネチアで初演した「オドアルドとクリスティーナ」の話です。これは、ナポリでやったばかりの、「リチャルドとソライーデ」と「エルミオーネ」とのミックスで出来ているそうです。ナポリとヴェネチアは当時の交通手段では大変遠いから、誰も聞いていないと考えたのでしょうか。ところが劇場の客席で歌手より前に全部の曲のテーマを歌ってみせるお客がいたのです。ナポリの商人でした。彼は観客に騒ぎを起こしましたが、それだけ、格別な非難もありません。彼の方の疑問は「何故題名を変えたのか」でした。

この事件を詰問されたロッシーニの弁明がふるっています。

「わたしはどんな約束をしましたかな。公衆に受ける音楽を提供することでしょうが。この音楽は成功した。〈それで十分〉。」

「ビアンカとファリエーロ」は2005年ペーザロのロッシーニ音楽祭の

DVDをみた感想です。この年にはペーザロへ行っていたのに、この曲が上演されたのは知りませんでした。街はイタリア語だけだから、初来訪者には字が目に入らなかったのでしょう。残念です。

<

タイトル

イタリア・オペラ史 (99) 「マホメット 2 世」

本文

1820 年の作で、英雄的メロ・ドラマと、ロッシーニは呼んでいます。ロッシーニは同じオペラを改作し、1826 年パリで、「コリントの攻城」の名で発表していますが、私の見たDVDは 1820 年作のものを手直したものです。

「コリントに近いネグロポンテのヴェニス植民地にあるパオロ・エリッソの城内で、作戦会議が開かれ、マホメット 2 世の攻撃への対策を立てているが、隊長カルボを中心とする徹底抗戦派の意見が大勢をしめる。会議後カルボは城主エリッソに娘パミーラとの結婚を求め、了解をうる。父は娘にその旨を強く伝えるが、パミーラには街で出会ったボーイフレンド、ウベルトが忘れられない。

ウベルトは実はマホメント 2 世の偽名で、彼はコリント市街の調査もしていたから、この地の地形を良く知っていて、この度の攻撃は防御側の予期せぬ形で進展し、エリッソとカルボは逮捕される。エリッソの名を聞いて、マホメットは自分の恋人の父であることを知り、パミーラはマホメット 2 世とであって彼がかつてのウベルトであるのを知って、二人の間に恋情が燃える。マホメットは彼女にプロポーズし、受けて王冠を被ってくれと申しでる。彼女は父とカルボの放免をもとめ、プロポーズは宗教的理由で無理だという。マホメット 2 世はイスラム・パスを彼女に与え、行動の自由を認める。彼女はこれを父とカルボに与え、二人は密かに出獄し、再戦闘に備える。

トルコの城攻めが始まり、パミーラは死を覚悟する。しかしカルボの勇

敢な活躍で、城は守れ、マホメットは逃走する。バミーラとカルボは結ばれる。」

劇はすっかり変身したロッシーニです。軽快さは感じられても、リズムより、縦に重なった、音色にとんだ響きに依存したオペラです。格調高い名作セリアだと思えます。ロッシーニの幾つかのソプラノは美しい響きの人が適役であると思いますが、この曲はその例です。劇的な声もオペラによって適役（例「アルミーダ」）ですが、主役のバミーラは嘆き訴え泣く役で、頑張る必要はありません。ひたすら耐えるだけです。私の見たヴェネチア・オペラのDVDも、オランダ放送の録画も、美声のソプラノでした。

メロディが美しいだけでなく、和音の厚みが従来の曲より増しているのがわかります。特にクラリネットを始め木管楽器に注意すると楽しく聴けます。

1820年は現実のナポリの政治情勢が大きく変化し始めた年です。ボローニアで政治にかかわりをもって、革命運動に関係したのが、ロッシーニをナポリに転居させた遠因でしたが、スペインの支配下にあったナポリに、またイタリア独立運動がくすぶり始めました。ご本家スペインでの立憲革命の影響で、ナポリの「炭焼き党」を刺激し、7月に革命政府が樹立されました。この政府がメッテルニッヒを中心としたオーストリアの干渉をうけ、21年3月には倒れましたが、この間9ヶ月のロッシーニの挙動は不明です。有名人になっていた彼がボローニアでの轍を踏むとは思えませんから、政治とは距離をとっていたことでしょう。彼のナポリを中心とした活動は終焉に近づいていました。1821年12月には彼を支えたナポリ・オペラ座支配人バルバイアがウィーンのエペラ座と契約したのは彼の身分にも影響する筈です。

「マホメット2世」の初演はナポリのサン・カルロ劇場で1820年、バミーラを誰がやったかわかりませんが、私が見たDVDは1822年12月ヴェネチア上演の改定版です。両者は大分違ってきます。

タイトル

イタリア・オペラ史(100) 3大セリア「セミラーミデ」

本文

偶然だが、この名作が拙文イタリア・オペラの 100 回目にあたるのを嬉しく思います。「ホッペアの戴冠」(モンテベルディ)「オテロ」(ヴェルディ) それに「セミラーミデ」がイタリア・オペラ史で三大セリアという人が多いからです。

「セミラーミデ」は 1822 年から 23 年にかけて作曲されたもので初演はヴェネチアのフェニーチェ座です(1823 年 2 月)。セミラーミデは妖艶な女王の名で、この役をコルブランが歌いました。コルブラン嬢は、ナポリの劇場支配人バルパイヤの恋人でしたが、ロッシーニがナポリで活躍を始めると、いつの日からか、ロッシーニとの仲が噂に上るようになります。バルパイヤはオペラ座の支配人です。ナポリでのロッシーニ・オペラでは主役を殆んどコルブラン嬢がやっています。勿論彼女は名花でした。1822 年 4 月二人はボローニアで結婚式をあげます。そのあとの初演でした。

「話は紀元前、古代バビロニアでの出来事です。主役は 3 人、女王セミラーミデ、実はその子であったアルサーチェ、セミラーミデと囚って前王ニーノを殺したアッスール。アルサーチェは前王ニーノの特命で、アッシリアに派遣されていたが、今回の事件が契機で女王からの命令で帰国。後任の王決定をめぐって事態は紛糾する。

セミラーミデはわが子とも知らずにアルサーチェに恋慕し、アルサーチェは王女アゼーマをしたう。二人の対談は言葉の行き違いで、誤解を生み、母と子の結婚が成り立ちそうになる。

この事柄を公表したとき、突如嵐が起こり、王の亡霊が現れ、「アルサーチェの戴冠は認めるが、その前に我が殺害者を殺せ」と叫ぶ。

二人の王殺害者の間は厳しい関係になる。王ニーノの意思を体現してい

る、大祭司長オーロエから、王の遺言をアルサーチェはきき、復讐を決意するが、未だ事実をしらないセミラーミデは息子アルサーチェに言い寄る。彼は意を決して女王に「あなたの息子である」と言明、二人は親子の再会を喜ぶ。女王セミラーミデはアッスール殺害を願う。前王の墓の前に、三人はそれぞれの願いをもって集まり、大祭司長オーロエの介添えもあって、不本意にもアルサーチェは母セミラーミデを殺害、アッスールは大祭司長の指示で逮捕され、アルサーチェが新王として承認される。」

オペラは劇的で、イタリア・オペラ伝統の明るさを失っていますが、迫力は大変あって、見るもののココロを揺さぶります。スタンダールはドイツ的であり過ぎる作品と評価しています。私がみたのは1992年のメトロポリタンオペラのもので、妖艶セミラーミデはジューン・アンダーソンでしたが、ほかにDVDは知りません。CDはあります。

ロッシーニのウィーン訪問は上演一年前の1822年で、熱烈な歓迎を受けます。彼は三月末か、四月初めにベートーヴェン宅を訪問します。ベートーヴェンは既に「運命」や「田園」などの交響曲を発表し、名声が確立していました。彼が部屋に入ったとき、かなり明快なイタリア語でこう言ったそうです。

「ああ、ロッシーニ！あなたですね、「セビリアの理髪師」の作曲家は。おめでとう。あれは素晴らしいオペラ・ブッフアだ。スコアを読んだが、実に愉快だった。イタリア歌劇が存在する限り、上演され続けるでしょう。あなたはオペラ・ブッフア以外のものを書いてはいけませんぞ。他の分野で成功しようと考えたら、それはあなたの天分をゆがめることになるでしょう。」

帰路朽ちかけた階段をおりながら、ベートーヴェンの孤独と貧窮を思って涙した、といます。その夜、メッテルニッヒの開いた豪華な歓迎晩餐会に出席したロッシーニは、ベートーヴェンの窮状を救おうと、終身年金の寄付を提案するが、協力を申し出た人はいなかったし、晩餐会に引き続き行われたロッシーニ歓迎会で、演奏されたベートーヴェンの三

重奏曲を聴きながら、彼は天才芸術家の不幸に胸を痛めたそうです。以後の作品にはベートーヴェンの影響が見られるようで、このオペラにも見られるのでしょう。

彼がウィーンにいたのは、三月二二日から七月二二日までですが、この間、サリエリと大変親しい日々を過ごしました。サリエリは当時既に「モーツァルト毒殺説」を流され、少し苦境にありました。二人は何度も一緒に歌を歌った仲でしたが、そのことを知ってロッシーニはある日サリエリにこう聞いたそうです。

「あなたは本当にモーツァルトを毒殺したのですか、とね。するとサリエリお爺さんは姿勢を正してこう言ったのだ。・・・私の顔をしっかりみてごらん。人殺しにみえるかね、と。確かにそんな風にはみえなかったよ」こんなロッシーニの後日（1855年）談が残っています。

「セミラーミデ」を作曲した頃のロッシーニは若くて世間に認められた風雲児でした。そんな彼の目に映った事柄への追想から、当時のロッシーニの人柄が感じられます。彼は率直な人の良い好青年だった、というのが私の感想です。



タイトル

イタリア・オペラ (101)

「ランスへの旅」



本文

<>これはフランスのロッシーニ作品の最初のもの、1825年パリ初演、フランス語で書かれたオペラブッフオで、「戴冠式を見に行こう」というコマーシャル・ソングのようなものです。ロッシーニもその心算だったから、上演が終わると、解体して、半分くらいは次のオペラ「オリー伯爵」に使ったほどですから「ランスへの旅」は長年無視されてきましたが、最近楽譜の完全復元がなってみたら、オペラとして傑作で、上演されるようになりました。今年のペーザロ音楽祭でも演奏会形式で公演されます。

「ランスで行われる戴冠式を見に集まった、貴族が黄金百合亭というホテルでみせる暇つぶしの出来事です。各人がそれぞれに思いを歌に託して、時間を過ごします。貴婦人フォルビルは着ていく服がトラブルに巻き込まれ届かなくて悩む、有名な女流詩人コリンナ、彼女を慕う大佐シ

ドニー卿、貴族たちの健康管理をする医者、そして大事なのは宿屋の女主人コルテーゼ夫人で、なんと独唱役は18人もいます。戴冠式へ行く馬が手に入らないことがわかるのが話しの落ち。せっかくの楽しみを全員が奪われ、代わりに楽団を招いてここで、全員で音楽会をやることになる。それが国歌やら民謡やら次元の低い音楽会となる。最後は女流詩人登場で、即興でシャルル10世を讃える詩を作って披露、幕」

私がみたDVDはスペインのバルセロナ・リセウ劇場のものでした。当初は何んともしまらないオペラだと思っていましたが、美しい声が披露されていくと、何時か時間を忘れました。フランスのオペラはドラマというより、ショーであり、だからバレエが必需品です。このオペラも同じです。ロッシーニはこの特色をたくみに利用して、フランス人になりすまし、いつの間にか洗練された作曲家になっています。以後彼はフランス語のオペラを書き続けます。もともとメロディの名手ですから、こういう美しい声の歌のオンパレードで出来上がったのが傑作になっても不思議ではありません。

ロッシーニがフランスへ来た経緯はこうです。彼を片腕と頼っていた、支配人バルバイアがウィーンへ行ってしまったことから、ロッシーニがナポリにとどまる理由が消えます。かれは「ゼルミーラ」を1822年にナポリでやって、ナポリでの契約をすませ、2月16日に初演を終え、自由になります。彼は大旅行の計画を立てましたが、ナポリの新聞はそれが旅行ではなく、別離であると捉えたようです。

3月7日にナポリをたち、ボローニアに立ち寄って3月16日コルブランと結婚式をあげ、ウィーンに行きます。7月にウィーンをたち、イタリアに戻ったあと、1823年2月ヴェネチアで「セミラーミデ」の初演を終えて、彼はイタリアを離れます。

1823年11月9日、ロンドン旅行の途中立ち寄ったパリで、大歓迎を受け、その狂った歓迎振りが歌芝居としても残っています。

一ヶ月のパリ滞在のあと、夫婦でイギリスへ向かいます。

イギリスでも夫婦は同様の熱烈歓迎を受け、彼らはそこで声楽教師、ピアノ伴奏者として大金を稼ぎましたが、この料理のまずい国での定住は夢にも思わず、彼は既にパリ定住を決意していたようです。

パリへ帰ったのは1824年の8月。ルイ18世に謁見、イタリア歌劇場の監督の地位をえて、その1ヶ月後、王は薨去、次の王シャルル10世にも契約は確認され、彼はこの地位と報酬、それに年俵をうることになります。彼は一旦ボローニアへ帰り、来訪して、とめどないパリの生活に入りました。

1822年2月から1824年の9月までの2年半の経過はこの通りで、丹念に迎るとロッシーニの人気があぶり出てきます。

そんな状況で、シャルル10世の戴冠式を行われ、そのために作曲したオペラが「ランスへの旅」(1825年6月19日)です。

タイトル

イタリア・オペラ(102)フランス風オペラ「コリントの攻城」

本文

フランスのオペラはイタリアとは違うし、社会的地位もイタリアのオペラほどではありませんでしたが、何せパリは当時文化の中心で、ロッシーニはそのオペラを仕切っていましたから、フランス人にオペラの素晴らしさを普及しようと意気こんむのは当然でしょう。最初の「ランスへの旅」はシャルル10世戴冠式目当てのいわば際物、次の「コリントの攻城」が本格的な作品です。

「コリントの攻城」は新作ではなく少し前の「マホメット2世」(小文イタリア・オペラ(99))の改作ですが、全く新しいオペラのように感じられます。序曲からして雄大な叙事詩の感じです。

「場所はコリント市。マホメット2世がビザンチンを陥落させた勢いで、コリントを攻撃してくる。コリント軍総督クレオメネは作戦会議をひら

き、徹底的抗戦をととなえ、隊長ネオクレも賛同、勇壮な合唱のあと、皆が去り、ネオクレは提督に娘パミーラとの結婚を申しでる。提督は認め、パミーラにその旨強く伝える。パミーラは驚き、実は昔アテネで知り合った外国人アルマゾールと深い仲にあることを申し出るが、国の危機の折でもあり、結婚を決意する。

ギリシャ軍は抵抗するが、トルコに負け、コリントはほぼ陥落、隊長マホメット 2 世はギリシャの美術品と提督を大事にせよ、と命じる。かつてアテネで知り合った恋人のギリシャ娘のせいである。提督は逮捕され、マホメット 2 世は彼に「無駄な抵抗を続ける一部のギリシャ軍に反抗放棄を命令せよ、」と要求するが、提督は拒否、マホメットは怒って殺害を命令、そこへ父を心配して現れたパミーラをみて、彼女がかつての恋人だと知る。二人の出会いは喜びと当惑を生み、結婚を条件にこの町の開放をマホメット 2 世は認める。パミーラは一度約束した将軍クレメネとの結婚放棄を宣言、提督と将軍は怒る。

マホメット 2 世のテントに囚われてきたパミーラは女としての愛とギリシャ国民としての祖国愛の板ばさみに苦しむ。マホメット 2 世はやさしく慰める。結婚式の準備が進む中、将軍ネオクレが殺害目的に忍び込んで捕らえられるが、パミーラが兄だにごまかし、一時をしのぐ。コリントの残党が遠くから攻め込んでくる。パミーラは最後になって結婚を拒否、「あなたを愛していました。しかし祖国の人と死にます」と叫ぶ。マホメットは怒ってコリントの町の全壊を部下に命じる。

コリントのカタコンベ(共同墓地) に集まったギリシャ軍は最後の抵抗を誓い、パミーラはネオクレとの結婚を誓う。一同戦いに出発、善戦むなしく全員の死亡が伝えられ、それを知ってパミーラも自害する。立ちすくむマホメット 2 世の背後にコリントの街が赤々と炎上する様が浮かび上がる。」

この見事な筋立ては、前作と同じ題材を使いながら、遙かに説得力があります。前作でもオペラをみながら、パミーラの自害を予測するのが自然でしたが、舞台をコリントではなくヴェニス植民地にとり、ヴェニ

スからの援軍によってストーリーを逆転、ギリシャに勝利させ、ハッピーエンドにしています。これはロッシーニ当時、オペラはハッピーエンドという取り決めがあったからでしょう。

似た面白い例が「タンクレーディ」というオペラにあって、これは二つの筋書きをロッシーニは作曲しています。タンクレーディが戦死するか、生きて帰るかの二つです。私は悲劇が絶対良いと思いますが。

もう一つこのオペラが提起している問題があって、フランス風のグランド・オペラがいいか、伝統的イタリア・オペラがいいかです。上に書いた筋は前の「マホメット2世」に比べ、グランド・オペラに合っています。パミーラの運命は泣かせますが、戦闘、陥落、都市の炎上という壮大なスケールが前景に浮き上がってきます。この二つが噛みあっていることがこのオペラの傑作たる所以でしょう。

ロッシーニとシャルル10世との契約ではオペラ座にフランス語のオペラを製作することも入っていて、これはその第一作1826年10月26日初演され、「曲のどれもが三倍の拍手で祝砲がとどろいた」とあります。20年代後半はイタリアでもパリでもロッシーニの時代でした。

不思議なことに「コリントの攻城」はDVDにはなっていません。CDがあるだけですが、「マホメット2世」のDVD（フェニーチェ・オペラ）があるから、大体は想像できます。

次作「モゼとファオロ」は「エジプトのモゼ」の改作ですが、こちらは改作の方がDVDになっています。

タイトル

イタリア・オペラ史(103) 改作ブッファ「オリー伯爵」

本文

しゃれているとはこういう「オリー伯爵」のようなオペラのことをいうのでしょうか。ロッシーニの一番有名なオペラ「セビリアの理髪師」と比

べて何としゃれていることでしょう。音楽がしゃれているし、筋も垢抜けしています。

「1200年のころのフランス、十字軍という当時流行りの宗教運動、聖地イエルサレムをイスラムから奪い返す運動が盛んで、男どもはみんな故郷を離れる。実際は必ずしも戦争に行くだけでなく、途中で出会うスリルを楽しむこともある。こうなると、故郷に残される女たちは男のいない、亭主のいない村で暮らすことになり、ストレスが溜まる。そこをついたのがオリー伯爵、彼は孤閨を嘆く、女どもの世界に隠者(世捨て人)として入り込む。

一幕はフォルテモティア城近くの草原、洞窟前で集まる女達に、洞窟に住んでいる隠者の話題が広がる。女どもと面談して幸せにするという如何わしい話し、そこへ隠者が現れ、今夜は若い女性だけ相談に応ずるといふ。複数の女が洞窟に入る。皆興奮して出てくる。そこへ侯爵を探す家庭教師が到着、8日前から色気違いの息子が行く方不明、隠者がそれらしいという。

洞窟の近くにある城の女主人アデーレも体調不良を訴え、隠者に見てもらおう。隠者は恋をしなさいと勧める。隠者の小姓イゾリエーロは従姉妹のアデーレに憧れているので、二人の恋が成立しそうになるが、隠者の狙いは女主人。邪魔をする。そこへ家庭教師が現れ隠者の正体が「オリー伯爵」と露見。彼は札付きの不良。

二幕は館の中、女性だけの世界、美しい女性合唱がこの世の天国を思わせる。彼女たちが化粧に余念がないとき、雷鳴、落雷、降雨が起こる。隠者は家来15名は全て修道尼に変身し、これを機会に館に入り込むよう懇願し、認められる。宿の女性が時折、尼僧を監視に現れるが、その都度尼僧は真面目な修道僧に変身、両者は微妙なやりとりをして、お互いの好奇心をみたま。アデーレとオリー伯爵の間でも似た関係が起こる。館の女性は奥へ引きこもり、舞台は偽修道僧の集まり、彼らは与えられた飲食物に満足せず、館内を探検し、ご馳走をみつけ、酒盛りとなる。見事な男性合唱が20分も続く。

再び嵐、酔いしれ、少しずつ正体を現す。寝床の準備をしたが、夜、明

日は十字軍が帰還すると伝えられ、偽修道僧を入れたための混乱に館の女性軍は落ち着かぬ思いにある。館の女主人アデーレは修道僧の頭、偽の隠者の訪問を受け、やりとりがソプラノとテナーのスリルな2重奏、更にその怖さにおののき、夜を無難に過ごすため若い小姓イゾリエーレを身近において、夜を迎えるが、そこへオリー伯爵が忍び込む。こんどは女性2、テナー1の3重奏。きわどい場面に追い込まれるが、ラッパが鳴って、十字軍の帰還、女性一同無事、それぞれの相手と対面、ハッピー、ハッピー」

大人の〉お遊びで、見事な、品のよいコメディです。今も上演され、私の見たのは1996年イギリスのグランドボーン・オペラでやられたもので、DVDにもなっています。男主人と女主人とがいながら、二人だけでなく、男性軍と女性軍という扱い方をしているので、ドラマはグランド・オペラの名に相応しい雄大なものとなっています。

上演は1828年8月パリオペラ座です。

1927年2月にロッシーニは母を亡くします。彼にとっては大変な衝撃でした。ボローニアに残した妻コルブランと父との仲は険悪になっていきました。コルブランの頭が少しおかしくなったようで、日夜宴会を開いて、乱痴気さわぎで財産を食いつぶしたようです。1831～33年の父の手紙はコルブランの悪口に満ちています。この頃(1830年)、コルブランはイタリアの田舎に引っ込み、ロッシーニと別居、彼はパリのイタリア劇場の屋根裏に住み始めます。この後の話しになりますが、1832年7歳下のオランプ・ペリシェと知り合い、40男と30女は恋に落ち、1837年二人はボローニャを訪ね、コルブランと面会、彼女は14歳年下のライヴァルを見て諦め、その前に決まっていた財産分与を承認して離婚します。新しいカップルは同棲生活に入り、コルブランは1845年死去、ロッシーニは1846年54歳で結婚、オランプは結構良い妻として1868年76歳の死まで尽くしたそうです。

ロッシーニの女性関係がこれで全てとはいえないでしょうが、「オリー伯爵」の根底にある女性感にはどこか彼の結婚感と結びつくものがあり

そうです。彼は遊びの男女関係を認めています、それが結婚まで進むには、時間がかかるようです。相手の過去がどうあったかは、余り問題になく、二人の間に時間をかけて深い関係ができることに重きがあった、そう感じます。第一夫人コルンブランは支配人バルバイアと散々噂が合った女ですし、第二夫人オランプも同居した男性は5人はくだらなかったそうです。そんなものを越えて10年もかけ結ばれたロッシニーは彼の音楽のように、軽くしかし、深いものを、男女の仲に求めていたのではないのでしょうか。

タイトル

イタリア・オペラ (104) 「ウィリアム・テル」

本文

小学校の運動会の徒競走で、昔は必ずかかった「行進曲」はウィリアム・テルの序曲です。序曲は「夜明け」「嵐」「牧歌」「スイス独立軍の行進」(上記行進曲)です。これらがオペラから全くとられていないのも興味があります。3時間半(208分)もかかる名曲です。

話しはスイスの独立に絡む話で、テルが子供の頭にリンゴを載せ、弓で射落とすよう悪代官に命じられるのがクライマックスです。原作はシラーの「ウイヘルム・テル(1804)」です。イタリア語は「グリエルモ・テル」。話しを読んでいると、如何にもスイス独立の志士テルと悪代官ゲスレルの戦いで、テルのリンゴの話は最もに感じられますが、実際はスイスではなかった話でシラーの創作、デンマークの昔話から取ったそうです。

「スイスの谷間、当時(13世紀)はオーストリアの統治下にあり、代官ゲスレルに虐められている。村の有力者はメルクタール、息子はアルノルド、彼がたまたまハプスブルグ家(オーストリアの支配者)王女を難から助け、二人は恋仲になる。テルはこの村の正義漢。



村人がゲスレルの部下に追われているのをテルは助ける。テルが匿ったメルクタールは逮捕され、殺される。

二人の恋人は密かに会う瀬を重ね、王女は彼がハプスブルグ家の軍隊に入って手柄をたてれば、二人は一緒になれると勧める。そこへテルが現れ、父メルクタールが殺されたとアルノルドに伝える。アルノルドは目覚め恋を犠牲にして、正義の戦いへの参加を誓う。

リンゴの場面は予期せぬ言いがかりで起こる。スイス統治 100 年の記念日、町の広場に棒をたて、ゲスレルは帽子をかけて、村民に敬礼を要求。テルは誇りから無視、これを見咎め罰として息子の頭にリンゴを載せ、弓の名人テルに射落とせと命令する。無事成功したが、そのあと更に言いがかりをつけ、二人を逮捕、そこへ王女が現れ、代官への命令を出し、息子だけは引き取る。

テルは逮捕され、毒蛇のすむ島に運ばれるが、嵐がひどく、操舵にたけたテルがこぎ、嵐に乗じ、違う場所につける。息子があげた狼煙に気づいたため、そこでテルは息子から弓を受け取り、ゲスレルを射殺す。アルノルドは留守中にゲスレルの城を落とし、スイスに自由が来るのを示す。あたりは夜明け、アルプスの山に希望に満ちた太陽が輝く。」

余りにも長大で、度々聞く気にはならないが、丁寧に見ると大変感動を呼ぶ。独唱と合唱が巧みに入り混じっていて、ヴェルディのオペラを思わせるところも多い。一方独唱はロッシェニならではのメロディが繰り広げられる。私がみたLDはスカラ座でムーティがやったもので、ザンカネッロ、スチューダー、メリットという最上の組み合わせだった。

これでロッシェニはオペラの筆を折った。これを書いたとき筆を折る気にはなっていないし、オペラの評判も上々だった。このあと「ファウスト」を書く計画もあった。それなのに何故やめたか、色々の推測がある。私にだってわかるが、これ以前の彼のオペラはリズムが劇進行で大事な役をしているが、このオペラはドラマという原点に戻ったようで、ドラマに必要なものは何故かを考えなおし、音にしているように思う。定式はなくなった。新しい定式をみつけて答えを出すのは彼には無理だと思

ったのだろう。それは結果としてヴェルディの登場を待たねばならなかった。

ロッシーニは 1830 年また政変に巻き込まれる。パリの 7 月革命で、前年新たな良い条件の契約を認めた、シャルル 10 世がイギリスに追われる。彼の弾圧的政治が選挙権の剥奪、一部への権力の集中などで人心が離れ、27 日から 3 日間の革命軍はオルレアン公ルイフィリップを王に担ぎ出した。

この王は芸術への理解が今一つなかったもので、5 年かけて裁判闘争をし、シャルル 10 世との契約をロッシーニは認めさせた。年賦金 6000 フラン。ロッシーニが死ぬのは 1868 年。大変な勝利となる。

タイトル

イタリア・オペラ(105) ロッシーニ,自演のオペラ

本文

ロッシーニはモーツアルトの死の翌年 1792 年に生まれ、1868 年に死にます。オペラをやめたのは結果として 1829 年(37 歳)でした。彼はそれで隠居と考えたかもしれませんが、人生としてみると、以後の方が波乱万丈で、彼の晩年は自演のオペラのようなようです。

1830 年イタリア座の仕事はありましたが、契約相手のシャルル 10 世が七月革命で失脚し、彼との約束がパーになりそうになった。そこで新しい皇帝ルイ・フィリップを相手どって訴訟。

1836 年裁判で年金を確保してから、彼は年金生活に入りますが、そこで目立つのは美食家ロッシーニとしての生活です。彼は美食で体を壊しますが、今も残る沢山の優れたレシピを考案します。その第一期がこの時代です

彼の体調はじょじょに崩れます。しかし彼の社交は崩れません。ショパン、メンデルスゾーン、ベルリーニ、ドニゼッティなど後世に名が残る作曲家とあい、ある人には可也の面倒をみます。パリは世界の中心です

から。訪問者も多彩になります。

詩人ハイネの夜話から引用します。「(沈黙) はロッシーニのウイトかもしれないですね。[ペーザロの白鳥]というあだ名が自分に全然当てはまらないということを、皆にしらせてやろうとしたのでしょう(世間は沈黙を引退と理解している)。白鳥は死期が迫ると歌うものです。ところがロッシーニは人生半ばで歌うのをやめました。ロッシーニがそうしたのはもっともなことで、彼はそうやって自分が天才であることを皆に示したのです。(中略) 天才というものは、はやく最高の仕事をやり遂げて満足し、世間の評価や、ちっぽけな名誉など軽蔑するのです。」

メンデルスゾーンの手紙にこうあります。「昨日の朝、僕はヒラーを訪ねました。そこで誰に会ったか分かりますか。大きく丸々と太り、愛想の良い陽気なロッシーニです。！」これはフランクフルトでの出来事です。このあとロッシーニはパリ経由でボローニアに帰り、1837年コルブランと正式離婚します。

1838年パリのイタリア座が消失、親友の支配人が死んで、大変なショックを受けます。

1839年から転居してボローニア音楽院校長時代になり、後進の育成に専念、一度はボローニアに永住を決意します。この時代、オペラ以外に傑作を書いています。今も頻繁に演奏されるのは31年に書いた「スターバト・マーテル」、これはスペイン旅行で自身の健康を祈ったものですが、一度腰痛で中断、1941年に完成させます。

こんな話があります。ある日のこと友人たちは「スターバト・マーテル」の最後の部分を作曲中のロッシーニを訪問した。何をしているのかと尋ねられたロッシーニは頭を抱えて、

「音楽のモチーフを探しているのだが、頭に浮かんでくるものときたら、パイとかトリュフとか、そんなものばかりなんだ。」(ザノリーニの伝記)  
1843年パリで治療をうけねばならぬほど、病状は悪化、数ヶ月で快方に向かうと、早速手紙

「9月末にボローニアにもどりこれまで通り、一緒に散歩して、美味しいトリテッリーニを食べることができるでしょう。」(ゾボーリ宛て)

1845年前妻コルンブランの死。

1846年オランプと再婚。

1848年フランスの2月革命の影響でボローニアの民衆の態度が豹変、強い不快感からこの地に決別、

1851年フィレンツェへ転居、ボローニアの資産を全て売却。

この時期ロッシーニは精神的にも肉体的にもボロボロになります。精神錯乱に陥ったとさえ言われました。それを救ったのがオランプの献身的看護だったそうです。

1855年パリに到着、この頃には健康を回復し、第二の美食家時代を始めます

「ロッシーニが到着しました。彼は毎晩ヴルバルで冗談を飛ばしています。まるで引退した老サテュロスのように。(ベルリオーズの手紙)

1860年、ワーグナーとの逸話が残っているのはこの頃の出来事です。

「頓知の名手が、ある新聞で警句をロッシーニになすりつけた。ロッシーニが晩餐の席で、私の音楽に共感するカラーファにソースなしで、魚を勧め、旋律のない音楽が好きな男にはこれが相応しい、と語ったというのである。」

「ロッシーニはただちに公開文書によって真剣に抗議した。これは〈たちの悪い冗談〉であり、芸術分野を拡大しようとする者に向かって投げられた悪ふざけで、自分も許しはしない。と言明したのである。この話を聞いて、私は一刻も躊躇することなくロッシーニを訪問し、好意をもって迎えられた」(ワーグナー『わが生涯』)

これは「旋律」対『和声』というきわめて単純化された新旧音楽の比較論争の一部です。

1855年からロッシーニは「老いの過ち」と称するピアノ曲を死の年まで書き続けます。今は8枚のCDとして聞くことができます、

1862年70歳をこえたロッシーニは再び健康の安定性を欠くようにな

ります。64年には「小荘巖ミサ曲」をごく内輪の会で発表します。1868年の死までパリに住むことになります。今も小荘巖ミサ曲として聴けますが、「小」どころか、CD1枚にはどうしても入らない大曲です。当初は12人の独唱者と12人の合唱、そして二人のピアノとハルモニウム（日本のオルガン）で、身近な貴族や音楽家だけの前で演奏されました。この世とのお別れの歌のつもりではなかったか、と私は思うほど、しめやかな曲です。

同年のブローリオへの手紙にこうあります。

「私は絶えず神経過敏という恐ろしい病に見舞われています。それは五ヶ月以上も前から、私の睡眠と体力とを完全に奪ってしまったのです。同年11月13日、妻の名を口にしたのが最後となって、天才は世を去った。76歳でした。

1878年、妻オランプの死後、ロッシーニの遺産は彼の遺言により、ペーザロ市、フランス政府、ポローニア音楽院などに寄付されました

タイトル

イタリア・オペラ (106) [ロッシーニのためのミサ曲]

本文

>ロッシーニは彼の天才と人柄の良さで多くの人に尊敬されていました。彼の死は大変遅くきました。1868年(76歳)でした。

「ロッシーニのことを知らせてくださって感謝しています。彼とはそれほど親しかったわけではありませんが、私もまた、この偉大な芸術家の死を残念に思っています。私は弔辞の全てに目を通しました。ペランのものが最上で、トーマスのものが最低です。評価が間違っているうえに、余りにも狭いのです。芸術の境界はもっとゆるやかなものです。いや境界などありませんね。小さな歌謡でも、インスピレーションさえあれば、オペラのグランフィナーレと同じく芸術作品でありうるのです。」(デ

ユ・ロークルへの手紙)

「1人の有名な人物がこの世からいなくなりました。彼は私達の時代で最も名が知られ、親しまれた人でした。彼はイタリアの栄光だったのです！ご存命の今1人の人物（マンゾーニ）が亡くなったら、いったいあとに何が残るでしょう。われわれの大臣たちと、リッサ＝クストーザの勝利ですか」（マッフィイ夫人への手紙）

これは何んとヴェルディ（1813～1901）の二つの手紙です。ロッシーニが比較されたマンゾーニはヴェルディが最も尊敬している人です。[このあと数日たって、ヴェルディは新聞紙上で「ロッシーニを追悼するために、優れた音楽家たちが協力して一つのレクイエムを作曲しよう」と呼びかけます。そしてレクイエムが完成しましたが、波紋を呼びすぎて公開されませんでした。しかし1988年、リリングの指揮で「ロッシーニのためのミサ」のDVDがやっと発売されました。

ロッシーニとヴェルディという偉大な作曲家の交誼は殆んど知られていませんが、ヴェルディが若い頃の話があります。ボローニアに住んでいたロッシーニ（1837年以後）を彼は表敬訪問した。当時ロッシーニはヴェルディこそグランド・オペラを書ける作曲家と、高い評価をしていて、彼を歓迎した。その感想を後日ヴェルディは知人への手紙に書いている。「彼は心から歓迎してくれていると思いました。ともかく私は非常に満足しました。ロッシーニは世界の生ける誉れです。」

ドニゼッティ（1797～1848）も同時代のオペラ作曲家です。彼は無名時代が長く、またイタリアが中心の大作曲家でした。それをパリに呼び寄せたのはロッシーニです。1833年暮のことです。「ルクレチア・ボルジア」で名声をえた彼は、1834年6月ナポリの王立音楽院教授になりましたが、パリへの憧れは強く、ロッシーニの招待は夢にみた出来事でした。彼は「マリン・ファリエーロ」を手にパリを訪れ、1835年3月、ロッシーニの支配するイタリア劇場でこのオペラは上演されました。上記二つのオペラと35年に発表された「ランメルモールのルチア」は、脱ロッシーニが成功したドニゼッティのオペラで、ロッシーニはこれを

讚えました。時代はロマン主義初期にあり、ロッシーニの古典派オペラ超克が期待されていたのです。不幸にもドニゼッティはこの頃から梅毒に悩み、1848年4月8日故郷ベルガモで41歳の生涯を閉じました。

「マリン・ファリエーロ」をイタリア劇場でロッシーニと一緒に見たのがベルリーニ（1801～1835）です。彼はモーツアルトのような早世音楽家でした。1831年に「ノルマ」をスカラ座のために書いて、一躍時代の寵児となりましたが、パリへの足がかりが欲しく、そのためロッシーニの当時情人だったオランプに接近しました。策略は成功し、完成間じかだった「清教徒、イル・プリターニ」の楽譜をロッシーニに点検してもらい、助言もえました。1835年1月24日イタリア劇場で「清教徒」は初演され、大成功を収めました。しかしそのあとまもなく、彼は病にかかり、故郷シシリア島で不治の客となります。9月23日、34歳の短い生涯でした。葬儀を取り仕切ったのはロッシーニです。

ドニゼッティとベルリーニは、ロッシーニが作曲を続けていれば同世代人ということになりそうですが、30年代さえロッシーニ旋風が吹き荒れていました。彼はその恩恵を受けながら、ブームから少しはずれたところで、後世に残る仕事をしました。ベルカント時代と一括され、無視できません。



ロッシーニの死の翌日

(あとがき)

本小文はビッグロブのブログとして、2007/04/08～2007/06/23 掲載したものです。これ以前のブログにも若干ロッシーニを取り上げましたが、日本の現状ではこの内容では不足していると思い、再度とりあげました。日本でのロッシーニ理解は彼の大天才から思うと大変不足しています。35 のオペラのうち、目につくのは「セビリアの理髪師」だけというのは情けないことです。

この小文は前作「モーツァルトのオペラ」と同じように作曲に関連したゴシップや作曲家の当時の暮らし向きなどの紹介です。ただ知られていないので作品内容や原典などの紹介も加えました。

日本語のロッシーニ関連書は大変少なく、それらの殆んど入手不可能です。私としては勉強不足の気持ちがありますが、幸い DVD は NHK がかって放映したものが相当数手元にあったので、まとめる気持ちになりました。

この期間にアクセスして下さった方の数は毎回 30 程度で、満足です。